

超実践マニュアル 核医学

VERSUS 研究会監修, 對間博之 他 編集



昨今, 我々診療放射線技師を取り巻く医療技術の進歩は目覚ましいものがあり, 細分化もより一層進むことが予測される。それに伴い我々にはより高い専門性が求められる現状がある。医療に従事する技術者としてこの使命は自覚しなければならない。ただ, 一方で専門的な技量は単に技師の経験年数だけでは図ることはできない。それはある部門に専門的に従事する者, ローテーション等で幅広い部門に従事する者など, それぞれ従事する形態において技師の技量がまちまちだからである。特に核医学の分野は放射性薬剤を投与する前処置の段階から, 撮像, 画像再構成, 解析に至るまでの検査精度を決定づける多くの因子に診療放射線技師が深く関わっている。これほど診療放射線技師が深く, また幅広く関与する分野は他に類を見ない。また, 核医学検査は施設や検査の種類によっても検査頻度の差が大きく, その為, 経験値を補い技量を育成するまでにはどうしても時間がかかる。しかし, 日々検査が行われている臨床現場においては様々な技量を持つ技師が職務についていることを認識し, その中で最低限のレベルが常に如何なる検査内容においても担保できていなければならない。

その際, 単に撮像テクニックなどの解説書や理論を記した著書よりは, より実践的に構成された著書の方が有益と思われる。今回, この「超実践マニュアル」シリーズに託された狙いは, まさに現場の技量のバラツキによる最低限のレベルをより高いレベルにまで引き上げることを目指しているものであり, あえて理論より実践を重視した構成となっている。本書は前に実践編, 後に基礎編とすることで, 実際に診療現場で参考としたい資料が容易に検索できる工夫がされている。

まず, 実践編では脳神経系, 内分泌系, 循環器系, 消化器系, 泌尿器系, 骨・骨髄系, 腫瘍系, リンパ系, PET, RI 内用療法それぞれの領域ごとに「必ずやること」, 「できればここまでは」, 「さらに進めて」の3項

に区分して, 検査レベルの一元化が目指せる構成になっている。

「必ずやること」では文字通り最低限のレベルを意味しており, 核医学検査を行うにあたり必ず知っておかなければならない「使用放射性医薬品と体内動態」, 「標準投与量と被ばく線量」, 「前処置と投与時の注意」について, 情報を必要最小限に的確にまとめることで現場で理解し易い分量になっている。検査手技に関しても「基本的な撮像法」として収集, 画像再構成, 補正などについて, 実際に利用されている具体的な条件が明記されており, 初心者でも検査業務に利用し易い表記で構成されている。また, 正常画像や解析結果を表記することで, 必要な結果情報や検査の妥当性の確認に役立つだけでなく, さらに適用疾患についての記載があることで検査への理解をより深め易くなっている。

次に「できればここまでは」では検査時や解析時のテクニックが記されている。核医学検査では関心領域(ROI)の取り方による解析データのバラツキなど, 技量が反映されるポイントとしてよく問題視されるが, 本書ではこうした経験値の差によって陥り易いポイントを細かく指摘して適切にアドバイスがされている。

最後に「さらに進めて」では副作用や検査時に迷い易い具体例を質問とそれに対する回答形式でわかり易く記載されている。

基礎編では撮像装置の基本的なものから最新の技術に至るまでの幅広い構造, 撮像に対する基本的な考え方や放射性医薬品の取扱い, 装置の精度管理はもちろんのこと, リスクマネジメントをはじめとする医療事故のメカニズムに対する解説があり, 医療安全に対する考え方や取るべき安全対策についても記されており, 現在の医療現場に求められるニーズが盛り込まれている。

核医学に従事される診療放射線技師の経験値を問わず, 初心者は理解し易いマニュアルとして, また, 熟練者にとっても知識を整理するバイブルとして共有して現場で活用していただけると幸いである。

最後に, 本書が全国の診療現場の第一線で業務される皆様にとって, 経験値によるバラツキが大きいとされる核医学分野の診療放射線技師レベルの向上に, また高いレベルの一元化につながるよう, 編者及び執筆者全員の啓発活動が今後ともさらに発展することを願ってやまない。

(藤埜浩一 大阪大学医学部附属病院 医療技術部)

(ISBN978-4-86003-477-1, A5判 512頁, 定価本体5,184円(税込), 医療科学社, ☎03-3818-9821, 2016年)